

The Color and Landscape of the Coast of Fujian, China

MITSUBOSHI Muneo

Key words: Fujian, color, landscape, chinese banyan

Abstract

Data were collected on the color of the nature, the architectures and/or the landscape in the Coast of Fujian, China from the 27th of Feb. to the 2nd of March, 2009. Fujian was chosen in the present study for its cultural relationship to Okinawa (Ryukyu) in the past.

On the nature, neither of cherry tree nor pine tree was identified there, both of which are seen everywhere in Okinawa. Instead bamboo, tea fields and banana constituted the natural landscape of Fujian. Chinese banyan and the red soil were making more or less the common atmosphere between the two areas.

The vivid red and yellow were in flood in Fujian, which were stronger, to the author, than in Okinawa, and very rare in the rest areas of Japan. The other colors, blue, green or something, were not recognized so often, except for the police box. It seemed that the police was generally symbolized by the color blue.

The landscape of Xiamen city was close to Naha or other cities in Okinawa for its colonial colors (yellow red roofs and white walls).

中国福建沿岸部の色彩と景観

三 星 宗 雄

・キーワード 福建、色彩、色、景観、ガジュマル

はじめに

2009年2月27日から3月2日まで急ぎ足ではあったが、福建省廈門市を中心とした沿岸部の色彩と景観について調査を行った。そもそもの動機は沖縄（琉球王国）とのつながりからであった。王国時代に琉球は中国明・清王朝といわゆる進貢貿易を発展させ、東アジアの「コーナーストーン」（赤嶺、2004）として繁栄した。北京までの往復6千キロ超に及ぶ進貢使節団の最初の上陸地が福建であった（図1 廈門は泉州のやや南に位置する）。初期には市舶司（貿易官庁）が置かれた泉州が中心であったが、その後は省都福州に移った。福州には当時の琉球からの進貢使節団が居住した「琉球館」が残されている（写真2）。またその横には遠い異国の地で命を落とした団員の墓がある。そういう意味では沖縄から福建へという関心の流れはごく自然なものである。

また沖縄で見られる亀甲墓ときわめて良く似た墳墓がやはり福建にも見られると言う（赤嶺、2004）。亀甲墓は風水思想の表れとされている。風水思想の老家本元である中国にあるのは当然と言えば当然だが、沖縄と福建との文化的なつながりを強烈に思い起こさせるものである。

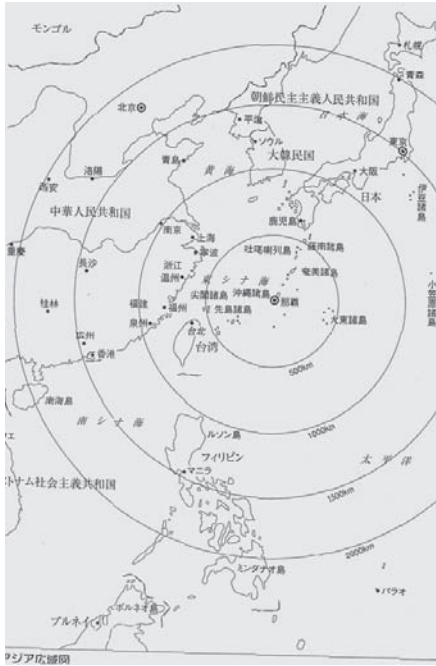
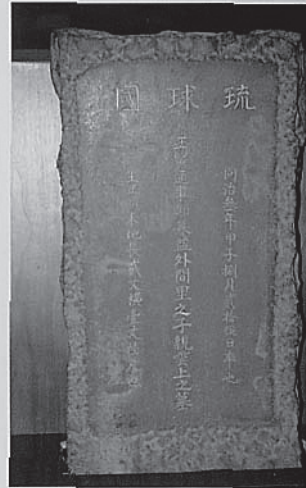


図1 沖縄（琉球）と福建（赤嶺、2004）

(海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会編、2008)



福州・琉球館



琉球人墓碑 同治三年(1864) 福建博物院

写真1 琉球館と墓碑

今回の調査では、福建の色彩および景観だけでなく、そうした文化的なつながりの足跡を辿ることも目的としたが、時間的な制約もあり、結局福州にはたどり着けなかった。また亀甲墓も確認することができなかった。写真1は文献から引用した鄭成功（後述）の墓である（海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会編、2008）。確かに沖縄の亀甲墓と酷似している。琉球からの使節団の墓もまた同じ形である（高良・田名、1993）。



南安・鄭成功墓

写真2 鄭成功の墓
(出典は写真1と同じ)

1. 自然

福建は緯度的には台湾とほぼ同じであり、沖縄よりも南に位置する(図1)。気候帯的には亜熱帯に属する。直前の1月に沖縄での色彩調査を行ったが、そこでは独特の濃いピンク色の寒緋桜が開き、半袖姿の人もかなり見ら

れた。ところが福建は予想以上に寒い地帯であった。情報によると廈門の平均気温は2月が13.2度、3月が15.4度である(データは参考文献のURLから)。那覇は2月の平均最低気温が14.3度、平均最高気温が19.2度、3月はそれぞれ16.2度と21.3度となっている。やはり沖縄の方が温暖なようだ。ちなみに東京は2月がそれぞれ2.4度、10.0度、3月が5.1度、12.9度となっている(データは参考文献のURLから)。

当地に滞在中はずっとセーターと薄いジャケットが必要であった。もともとそれらを脱ぐか、脱ぐまいかの丁度分かれ目あたりの暖かさ(寒さ)であった。

ここでは主に植栽について触れたいと思う。植栽はその地域のイメージを形成する大きな要素である。沖縄におけるリュウキュウマツやフク木がそれである。

〈サクラ〉

桜の原産地はチベットだという情報があった。それが正しいかどうかは分からない。残念ながら今その情報源にアクセスはできない。沖縄にはもちろん、台湾にも寒緋桜と同系統と思われる色鮮やかな、濃いピンクの花をつける桜が存在する。沖縄の人に言わせると、九州以北で見ら

れるような、ソメイヨシノに代表される色の薄い桜よりも、やはり濃い色の桜に強い親近感を覚えると言う（三星、2009）。この寒緋桜は明らかに沖縄の景観を形成する1つの要素である。

チベットが原産で、沖縄や台湾に生えているのだから、言わばその途中に位置する福建にないはずはない、と思うのは自然であろう。ところが1本も見られないのである。「1本も」という表現はおそらく間違いであろう。どこかにひっそりと生えているかも知れない。とはいえ、少なくとも、街路樹として、あるいは公園や民家の庭にまとも咲いている風景にはついで遭遇しなかった。また桜の木そのものにもお目にかかれなかったのである。福建の植栽については当初から強い関心があり、初日から目を凝らして観察していたので、これは間違いないと思う。わが国では桜の木のない景観を見出すことほとんど不可能である。そういう意味ではやはり異国を感じさせる景観である。

〈マツ〉

沖縄を訪れて「おやっ」と思わせる景観の1つは松の木（リュウキュウマツ）の存在である（三星、2008）。低木もあれば、10メートル以上の高木もある（写真3）。街路樹として片側半分が松の木、反対側がシュロの木という独特の組み合わせになっている道路も1本や2本ではない（写真4）。松の木はわが国の景観との強いつながりを思わせる（三星、2008）。

福建では松もいたるところで目についたというわけではなかった。いやほとんど見なかったと言ったほうが良い。これも桜と同じで、どこかに1本ぐらいい生えているであろうが、街路樹やホテルの庭園、公園、寺の境内などに普通に生えているものではなかったことは確かだ。

〈バナナ・竹・茶〉

沖縄の自然景観と決定的に異なるのは竹林と茶畑およびバナナの木で



写真3 (北中城村、中村家)



写真4 (うるま市)



写真5 竹林



写真6 茶畑

ある。廈門の街から山村地帯に移動する際の車窓の風景は、街から離れるにつれて（標高が高くなるにつれて）、パナナ、竹林、茶畑という順で変わっていく（写真5、6）。水田では牛が活躍している風景も見られた。竹林はいたるところで見られた。小山全体が竹林というものもあった。わが国の孟宗竹ほど太くなく、また高さもそれほどではない印象であった。世界遺産福建土楼では、壁土の中に竹を入れて補強しているという（NHK、2008）。「鉄筋コンクリート」ならぬ言わば「竹筋壁土コンクリート」である。また市内の建設現場では作業足場の組み立てに竹が使われていた。竹はこの地域の重要な産物となっているようだ。

福建は言わずと知れた茶の世界的産地である。ウーロン茶だけでなく、数多くの種類がある。



写真7 ガジュマル（沖縄浦添市）



写真8 ガジュマル（廈門市）

福建の茶畑は山の中腹にあり、竹林と並存している風景も独特のものがある（写真6）。

〈ガジュマル〉

ガジュマルの木と聞いて、スーパーマーケットの入り口などで売っている500円ぐらいの盆栽風の植物を思い出す人も多いであろう。しかし本来のガジュマルは大変な高木である。英名を Chinese banyan と言う。クワ科に属する。

ところで、ガジュマルは沖縄の言葉であることは案外知られていないのではないだろうか。何かインドのにおいがする樹木名である。沖縄では「キジムナーという妖精が棲む場所」として信仰されていると言う。確かに根が幾本にも別れ、さらに気根が行く筋も垂れ下がる光景はうっかりは近づけない神々しい雰囲気がある。写真7は沖縄浦添市役所前にあるガジュマルの木である。

ガジュマル（榕樹）の街は本来は福州市である。榕城の別名がある。しかし廈門市内にも遍在している（写真8）。同じ植栽は共通のイメージを醸し出す。

ガジュマルはインドゴムの木と酷似している（やはりインドだった！）。初めての人には区別がつかないであろう。わずかにインドゴム



写真9 赤土（バナナ畑が見える）

の木の方が葉が大きいだけである。ちなみにインドゴムの木は英名を Indian rubber tree と言い、同じクワ科に属する。

〈赤土〉

10 数年前になってしまったが、アマゾン河流域で自然の色彩についての調査を行っ

たことがあった（三星、1993；1994）。その時の赤土の色が今でも強烈に目に焼きついている。それ以来赤土を見ると熱帯を思い出さずにはいられない。熱帯の赤土はラテライト（laterite）と呼ばれ、栄養分の乏しい酸性土とされる。

福建の露出した山肌は明らかな赤土であった（写真9）。ただ茶畑は黒土であった。土壌改良などを行った結果であろうか。沖縄にも赤土が見られる。沖縄の赤土は少し黄色寄りであり、赤黄色土である。実際には私たちの周辺にも存在しているのであろうが（関東ローム層は赤土と言われるが、何せほじくったことがない）、赤土を見る機会がない筆者には、そこにはやはり共通のイメージを感じるのである。

ちなみに中国では東北部（黒竜江省など）の黒土、西北部（甘粛省など）の黄土、南西部（雲南省など）の赤土（紅土）というふうに、土の色によって地域を分けているという。

そもそも土の色から採られた色名は多い。テラコッタ（terra cotta、イタリア語）は「焼いた土」の意で、素焼きなどの素材、およびその材料となる粘土質の赤土から来ている。「弁柄」は、インド・ベンガル地方に産する赤土から作られた顔料から来ている。

2. 建築

廈門は福建省南部に位置し、九龍江の河口付近に広がる都市で、人口は約243万人である。すぐ目の前の金門島は中華民国（台湾）の領土である。台湾海峡を



写真 10 金門島に向かって

隔てて台湾と向かい合う。台湾の方角に向かって「一国兩制統一中国」の大文字が描かれていたのは印象的であった（写真 10）。

廈門は明の軍人鄭成功（1624-1662）が清への抵抗運動の拠点とした場所である。鼓浪嶼（コロンス）島の先端に巨大な石像が建っている。また島内に鄭成功記念館がある。ちなみに鄭成功は我が国の平戸で父鄭芝竜と母田川松の間に生まれ、7歳までを平戸で過ごした。近松門左衛門の浄瑠璃「国姓爺合戦」は彼をモデルとしたものだ。彼は後に台湾に渡り（逃れ）、彼自身は直後に急死したものの、子孫がオランダ軍を駆逐し、そのため彼は台湾解放の英雄とされている。

筆者が垣間見た範囲内だが、街は大変きれいであり、統制がとれているという感じであった。走っている車も高級車が多く、発展している印象を得た。ちなみに廈門は1980年に中国における経済特区の1つに指定されている。

廈門国際空港に降りた時に目についたのは鮮やかな青の表示板であった（写真 11）。中国のカラーイメージとしては赤や黄色が思い浮かぶが、予想に反して青であった。経済特区あるいは台湾との自由貿易都市としてのイメージを表現しているのであろうか。トイレの案内に見られる色



写真 11 廈門空港



写真 12 同



写真 13 華僑博物館（廈門）



写真 14 同

彩にも配慮がなされ、統一感が感じられる（写真 12）。

写真 13 は華僑博物館である。建物の外観は非常に落ち着いた雰囲気である。またトイレはおよそトイレらしからぬ外観である。アーチ型の入口も洒落ているし、その黄赤の色彩も辛うじて見える屋根の色彩と同系色となっている。ただし実際に用は足さなかったもので、室内については不明である（写真 14）。

博物館の中に併設されている自然館の色彩はやはり中国を思わせるものだ。「自然」の文字に鮮やかな赤色を用いることはわが国ではまず見



写真15 博物館付属の自然館



写真16 同

られない（写真15）。また説明文がすべて赤色というのも考えられないであろう（写真16）。我が国の感性では自然は緑のイメージではないだろうか。

福建は仏教信仰の地でもある。南普陀寺は唐代に建てられた歴史的な寺であり、福建南部の仏教の聖地である。五老山全体に多くの伽藍が配置されている（写真17）。写真に見える寺の案内表示板の色彩は、景観に配慮された落ち着いた茶色が使われている。寺の山門の緑色も珍しいが、何より柱に刻まれた赤色の文字が目を引く（写真18）。全体としてはやはり赤色が目立つ（写真19、20）。赤色および緑色は魔物からの守護の色であると言う。

寺は国内の観光客（参詣客）で賑わっていた（写真19）。団体客が多かったのが印象的であった。熱心な参拝者が多く、確かにこの地域には深い仏教文化が根付いているようである。



写真 17 南普陀寺



写真 18 同



写真 19 同



写真 20 同

ちなみに線香は、横浜中華街関帝廟でおなじみの長いものである。それを手に持って跪き、礼を繰り返す。線香の長さはわが国でははるかに細く、短い。歯ブラシなども小さい。この「短小化」については後で触れたい。また女性の観光客（比較的高齢）はほとんどズボン姿であり、大部分が黒あるいは暗い色であった。やはりスリムなイメージを演出している印象を受けた。

写真 21 は境内の中のあずま家である。屋根の形体は独特のものである。また屋根の色は以下に示す街の建築の屋根の色と一体感がある。周囲には松の木は見られない。わが国では必ず松の木が登場する場面である。写真 22 はやはり境内の中の池に描かれていたものである。「南無妙色身如来」は「餓鬼のような、みにくく、いやらしい姿から美しい姿に



写真 21 同



写真 22 同



写真 23 日光岩寺（コロンス島）



写真 24 同

導いて下さる如来様、お願いいたします」という意味だそうである。どうりで女性の参拝客が多いはずだ。ちなみにわが国では空海（弘法大師）が唐から持ち帰った仏教の經典に記されているそうであるが、ここは中国、いわばその原典にあたるものである。そう言えば空海が遣唐使として 804 年初めて中国の土を踏んだのも、ここ福建であった。

もう一つコロンス島の日光岩寺を訪れた。わが国の日光を意識して建立されたという。

寺のデザインおよび色彩は先の南普陀寺と同じである（写真 23、24、25）。それにしても岩自体に赤色の文字を刻む文化はどこから来ているのか（写真 23、26、27）。わが国では墓に墓碑銘を刻むぐらいしか思い浮かばないが、それにしても赤色は使わないであろう。



写真 25 同



写真 26 同

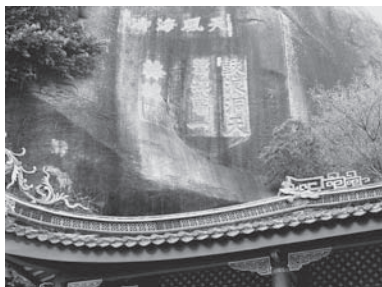


写真 27 同



写真 28 同

わが国よく見慣れた色彩の案内表示もある（写真 28）。

写真 29 は筆者が泊まったホテルの近くにある家具センターである。わが国では見ない色彩である。写真 30 と 31 は郊外で見つけた乾物 + 果物 + 花店である。漳州にある古い街の中にある駄菓子屋の色彩もこの通りだ（写真 32 と 33）。廈門の旧市街地で偶然遭遇した三星百貨店もまた赤（と金色）であった（写真 34）。小さなショップでも色彩の主張は

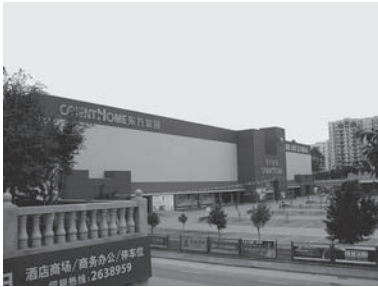


写真 29 家具センター



写真 30 乾物・果実・花店



写真 31 同



写真 32 古都の雑貨店



写真 33 同



写真 34 三星百貨店

強烈である（写真 35）。

そうした赤一色の中では公安の青は目立つ、目立つ（写真 36、コロンス島で）。しかしその屋根の色彩はきちんと「コロンIAL風」に統一されている。この青を見ると、空港内での、あの青色を思い出す。空港



写真 35 スタンド風店



写真 36 公安 (コロンス島)



写真 37 レストランにて



写真 38 「道の駅」にて

と公安、共通のメッセージを発しているのかどうか。

細部においても赤へのこだわりが見られる。レストランのテーブル番号 (写真 37)、郊外の「道の駅」(写真 38)、ホテル内の案内表示 (写真 39)、半端な色ではない。穏やかな色彩もある (写真 40、福建土楼にて)。しかしよく見てみると赤がしっかりと刻まれている。

人々の装いについてはどうであろうか。先に女性の観光客は多くが黒あるいは暗色のズボン姿が多いと書いた。若い人たちにはジーパン姿も多い。赤や黄色の服装で街を歩いている人はほとんどいない。しかし



写真 39 ホテルの案内表示



写真 40 永定土楼にて



写真 41 廈門市内の砲台にて



写真 42 孔子廟(漳州)にて

よつとしたイベントではやはり赤と黄色が用いられるようだ(写真41、42)。写真41は16世紀の明軍を再現した野外劇で、最終的には丘の上から近海を通る外国船に向かって砲撃する場面で終わる。

ところで、民家と言わず、商店と言わず、トイレと言わず、いたるところに赤地に黄色(金色または黒字)文字の張り紙を見た(写真43、



写真 43 廈門郊外



写真 44 永定土樓



写真 45 同



写真 46 同

44、45、46、47)。一種のおまじないであると言う。写真 46 には懐かしい顔が見える。先の乾物+果実+花店のウラにあったトイレは、女性の方に扉がついていただけでラッキーと言える空間であったが、それでも



写真 47 廈門郊外

張り紙はしっかりと貼られていた。確かに暗い、あるいは孤立したトイレで用（大きい方）を足していると、下から手が伸びてきたらどうしようと、一瞬心配になったことはあった。

3. 街の景観

写真 48～50 は南普陀寺内の太虎亭から見た廈門の市街の遠景である。写真 51 と 52 は対岸のコロンス島から見た廈門の遠景である。高層ビルが林立しているが、しかしそのビルも含めて、黄赤色の屋根をいただいた建築が明らかに偶然以上の割合で見られる。この屋根の色は沖縄を思い起こさせる。高層ビルがなければ、那覇の街と区別がつかないであろう。

この色彩はいわゆる「コロニアル風」と呼ばれ、イタリアあるいはスペインなどの地中海沿岸の色彩である。以前訪れた南米アルゼンチン北部のサルタという街の屋根の色彩がみごとにこの色彩で統一されていたのに感動した記憶がある（三星、2006）。筆者が「たかが色彩、されど色彩」を強く心に刻み込まれた瞬間であった。

さてマクドナルドである。今回の調査の目的の 1 つにマクドナルドの



写真 48 南普陀寺から廈門の街を望む



写真 49 同



写真 50 同



写真 51 コロンス島から廈門の街を望む



写真 52 同

看板の色彩があった。そもそもわが国に「騒色（公害）」なる言葉が生まれたのは東京世田谷のマクドナルドのネオンサインがきっかけであった（1985 年）。その地域がどの程度環境の色彩に気を配っているかはマクドナルドの看板の色を見れば分かると言っても過言ではない（三星、



写真 53 廈門市内



写真 54 同



写真 55 デパート（廈門市内）

2006)。マクドナルドの色はその地域の環境色彩への取組みのいわばバロメータなのである。

さて廈門はどうか。周囲に赤がこれほど溢れている環境の中では、マクドナルドの赤は目立ちようがない。写真 55 は廈門の中山路通りのデパートである。デパートからしてこの色彩である。しかし中には赤を使用していない看板も見られたし、また黒を背景とした看板もあった。色彩のグローバリゼーションは確実に進行しているようである。

最後に、先にも触れたが、福建（中国）の線香は長大である。一方わが国では短小である。ホテルに備え付けられていた歯ブラシもまた向こうのは巨大、こちらのはかわいらしい。箸もまた然りである。向こうの箸はこちらの採り箸である。

色彩についても、似たようなことが起きている。あのような極彩色の寺はわが国にはほとんどない。台湾も色彩的には中国である。沖縄は少しさめるが、それでも強い色が多い。そのように地理的に辿ってみると、色彩の彩度の終息地は奈良あるいは京都になるのだろうか。デザインも然り、また色彩についても、方向は逆であるが、色彩のシルクロードを考えないわけにはいかない。

最後に中国についてのパンフレットには、中国人の常識としてこう書いてあった。「赤やピンクは幸福をイメージする色として贈り物や包装紙に向く。黄色は皇帝のシンボルカラーで、新年の獅子舞も黄色…。紫色も高貴な色で、明・清の王宮紫禁城に通じる。白・黒・青は喪を連想させる色で、ファッション、プレゼント、包装紙には気をつける。緑色の帽子を男性がかぶると、妻に愛人がいるという意味になる」(上谷、2007)。緑色の帽子をかぶっていたのは私であった。恐る恐るホテルのボーイに聞いてみた。ボーイは笑いながら、大丈夫だと OK サインを送ってくれた。帰国後は緑色の帽子を被りっぱなしである。

引用文献

赤嶺守 (2004) 『琉球王国』、講談社。

廈門の気温

<http://wikitravel.org/ja/%E3%82%A2%E3%83%A2%E3%82%A4>

NHK (2008) 「世界遺産 中国福建省 福建土楼」、12 月 19 日放送。

三星宗雄 (1993) アマゾンメモー色彩・環境・熱帯雨林一、神奈川大学
人文研究 119、43-63.

三星宗雄 (1994) アマゾンの色彩：その測色学的研究、神奈川大学心
理・教育研究論集 13、76-96.

三星宗雄 (2006) 『環境色彩学の基礎』、マックローリン出版。

三星宗雄（2008）沖縄の色彩、神奈川大学人文学研究所報 41、23-31.

三星宗雄（2009）風景の理解、神奈川大学人文研究 168、1-28.

那覇の気温

http://www2m.biglobe.ne.jp/~ZenTech/world/kion/Japan/Japan_Naha.htm

高良倉吉・田名真之編（1993）『図説 琉球王国』、河出書房新社。

上谷章浩編（2007）華南—広州・廈門・桂林・海南島・上海—、（株）ラテラネットワーク。

海のシルクロードの出発点“福建” 展開催実行委員会編（2008）東アジアの海とシルクロードの拠点 福建—沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化—。